

主 題：感謝の人生：実践編－教会において
聖書箇所：ローマ人への手紙 12章3－8節

私たちクリスチャン、イエス・キリストの救いに与ったキリスト者たち、この救いは主の尊い犠牲によってなされたみわざでした。主の大きな犠牲によって、主は我々一人ひとりにすばらしい救いを備えてくださいました。私たちの努力、私たちの力では到底得ることのないこの救い、罪の赦しを主は私たちに与えてくださった。そのことをしっかりと覚えているのなら、我々はこのすばらしい神にどのようにして感謝を表わしていこうかと考えるはずだと、パウロはそのことをこのローマ書12章1－2節で教えてくれました。それは感謝の生き方です、主に感謝を表わす生き方、それがこんなにすばらしい永遠のいのちを与えてくださった神に対する、我々救われた一人ひとり取るべき態度である、選択すべき生き方であるとパウロは私たちに教えました。主によって救われたことを覚えているのなら、どうすればこの主にもっと喜ばれるだろうか、主を喜ばせるために何をしたらいいのかを当然考えると言います。感謝なことに、私たちはそのような人に生まれ変わったのです。

ですから、イエスを信じている皆さんには、間違いなくそのような思いがあるはずですよ。どのようにして主を喜ばせようかと。だから、主が忌み嫌われる罪から私たちはできるだけ離れようとし、罪を告白するというのもそのためです。「主に喜んでいただきたい。本当に主よ、感謝します。」と、まさにそのような生き方こそが主の前に正しい礼拝であると我々は学んで来ました。霊的な礼拝であると。主が望んでおられる礼拝とは、我々の心が問題です。我々が心から感謝に溢れてその方にささげるものです。なぜなら、私たちは礼拝者として生まれ変わったからです。本当のクリスチャンとは、礼拝者です。本当のクリスチャンというのは、真の神を心から愛してその方を礼拝する、そのような礼拝者です。

今日、皆さんはこの日曜日の朝、愛する兄弟姉妹たちとともにこの主を礼拝するために、こうして教会に集まって来られました。では、明日からどのように生きて行きますか？我々は礼拝者です。ということは、私たちは礼拝者として礼拝するために職場に出て行く訳であり、礼拝者として礼拝するために学校に行く訳であり、そして、私たちは例えそれが買い物であろうと旅行であろうとどこであろうと、私たちは礼拝者として主を礼拝するためにすべてのことをしている訳です。そのようにして私たちは生きていくのです。それが主が教えてくださっている生き方です。なぜ、そのようにするのでしょうか？救われていることを感謝しているからです。このようすばらしい救いに与ったことを感謝しているがゆえに、私たちの主への感謝を愛を示そうとするのです。パウロはこうして私たちに「この救いに与った一人ひとり、真の礼拝者として主が喜ばれる礼拝をささげる者として生きて行きなさい。」とこのことを教えてくれました。

今日から見ていく3節から、パウロは礼拝者としての生き方を具体的に教えてくれます。パウロ自身はこのような知識を読者の心に、また、頭に蓄えることではなかった、それが目的ではなかったことは明らかです。パウロが望んだことは、すべてのクリスチャンたちが、ローマに居ようと、そして、約二千年後の私たちであろうと、信仰者の一人ひとりが本当に真の礼拝者として日々を歩んで行くように、神を心から感謝している人がその感謝の人生を生きていくようにということです。ですから、どのように生きていくべきなのか、具体的にその生き方を我々に教えようとするのです。特に、我々が今日見ようとしているところは「教会において」のことです。一人ひとりの信仰者が、他の兄弟姉妹に対してどのような責任を持っているのか、そのことをパウロは私たちに教えてくれます。いみじくも、私たちは先週、ヨハネの福音書13章を学びました。恐ろしく感じることは、その時々重荷が与えられたみことばを学んでいます、先週、ヨハネの13章を学んで、今日はローマ書12章に戻ると、みことばはつながっているのです。先週、私たちはヨハネ13章のところから、主が与えてくださった新しい戒めについて見ました。13：34「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と。このことが教会にとっていかに必要なのかということを見ました。どうすれば愛を実践できるのか、そのことを見て来ました。

そして、パウロはこのローマ人への手紙を通して、どうすれば私たちは愛し合うことができるのかを教えるのです。そして、その後、あなたに与えられた賜物をどのように用いることによって愛し合っていくことができるのか、そのことも教えています。12：6－8を見ると、そこには様々な霊的賜物に

ついて書かれています。七つの賜物が記されています。預言に始まって慈善に終わります。そして、このローマ人への手紙を記したパウロは、Iコリント12章で、この霊的賜物について同じように教えています。そこで彼はこのように言います。12:7に「しかし、**みな**の益となるために、**おのおの**に御霊の現われが与えられているのです。」とあり、つまり、彼が言うことは、クリスチャンであるあなたは神からいろいろな賜物をいただいているが、それは、それを用いることによって周りの人々の信仰の益となるためだと言うのです。つまり、私たちに賜物が与えられているのは、それによって自分がどうこうではなくて、周りの愛する兄弟姉妹たちが、この群れの兄弟姉妹たちがそれによって成長して行くためだと言うのです。だから、兄弟姉妹を愛する者たちは、主に与えられている賜物を用いることによって、その愛する兄弟姉妹の信仰が成長するように、そのことを願って生きて行くのです。

ですから、こうして賜物を正しく活用すること、それはまさに、私たちが前回見たように「新しい戒め」、つまり、クリスチャンたちが互いに愛し合っていくことの実践とも言える訳です。今日、結論になりますが、どうしても皆さんに覚えていただきたいことが三つあります。このことを皆さんに分かっていただきたいと思います。

★覚えるべきこと

1. 主なる神はあなたを用いてくださる

イエス・キリストを信じているあなたを、神は確実にお使いになります。主はあなたを用いてくださる。どうしてそう言い切れるのか？それは、あなたに霊的賜物が与えられているという事実です。もし、あなたに霊的賜物が与えられていないとするならば、例外が存在するかもしれません。しかし、聖書は神はあなたに特別な霊的賜物を与えたと言います。それは神はあなたを用いようとしておられるということの意味します。

2. 主に用いていただくときに主の栄光が現わされる

あなたが主に用いていただくときに、あなたを通して主の栄光が現わされていくのです。そのために私たちは生きています。主のすばらしさを人々に明らかにしていくために我々は生きています。でも、その目的を果たすためには、あなたに与えられている賜物をあなた自身が用いることが必要なのです。主によって用いられることが栄光を現わすためには必要だということです。

3. 主に用いていただくときに教会が霊的に成長する

主があなたをお用いになるときに、あなただけではなく群れ全体が成長すると言うのです。だから、主に用いていただくことが非常に大切なのです。あなたのためだけではないのです。群れ全体のためです。そして、強いて言うなら、主ご自身のためです。その栄光のためにあなたや私が主によって用いられることが必要なのです。だから、我々信仰者は主の栄光が現わされることを望みながら、お互いの霊的成長のために仕え合っていくのです。自分の周りの愛する兄弟姉妹たちの、彼らの成長のために私たちは生きていくのです。そのために仕えていこうとするのです。パウロはそのことを教えようとするのです。そして、その上で、彼はその実践のために三つのことを私たちに教えます。このようなことを実践していくための注意事項です。

★互いの霊的成長のために仕え合う実践のために

A. 態度 3節

最初は、3節を見ると彼は「態度」が大切だと言います。仕え合っていく、愛し合っていく、人々の成長のために働きをしていく、けれども、大切なのはそれを為していくときのあなたの心の態度だと言うのです。3節「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、**慎み深い考え方をしなさい。**」、パウロはこの3節を通して、すべての信仰者たちに、そして、あなたや私に対して、謙虚さをもって、へりくだって仕え合っていくようにと教えます。というのは、このような働きをしていくために、いや、主が用いてくださるために、一番妨げとなるのがプライドだからです。そのことをパウロはこの3節で警告するのです。

1. プライドの罪

1) 自分を過大評価する人たちがいた

教会の中に自分自身を過大評価する人たちがいたのです。「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。」とパウロは言います。教会の中には自分自身が他の人たちに比べて優っていると思っている人たちがいたのです。それだけではありません。その中に、本当の自分よりも自分は優れた者だと思い込んでいる人たちがいたのです。パウロが教えることは、本当のあなたを知りなさいということです。自分の能力や、自分の賜物、また、自分の価値を過大評価している人たち、自分を買いかぶっている人たちがたくさんいたのです。その最たる例はコリント教会でした。どれだけの賜物をもっている

かによってその霊性を判断したのです。非常に墮落した教会でした。でも、このような問題はコリントの教会だけではありません。どの地域であっても、どの時代であっても、起こり得る大きな問題です。だから、パウロがまず与える警告は「思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。」です。

また、「神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」とあります。「信仰の量りに応じて」とパウロは言います。この「信仰」とは、神が与えてくださったものです。ですから、3節はそのように記しています。「神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量り」と。神がこの信仰を与えてくださったのです。何のために与えてくださったのでしょうか？神に用いていただくためです。神によって備えられた賜物をあなたが用いることによって、他の兄弟姉妹や教会にとって祝福となるために神があなたに与えてくださったものです。ですから、この信仰とは、救いの信仰のこと、罪からの救いのことではありません。ここで言われている「信仰」とは、あなたに与えられた賜物を用いるために必要な信仰のことです。

ということは、神はあなたに特別な賜物をくださった。そして、その賜物をあなたが実践出来るために必要な信仰も備えてくださっているということです。「私たちはどんなことでもできる」とパウロはピリピ人への手紙の中で言いました。自分の知恵によってでしたか？自分の力によってでしたか？自らの経験によってでしたか？「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と。ですから、パウロはここで、神はあなたに賜物だけでなく信仰を与えてくださったと言うのです。その与えられた信仰によって、あなたは与えられた賜物を用いることができます。

ここでパウロが警告することは何でしょうか？周りを見渡すと、みな違う賜物を持っています。その後パウロはもう少し説明をしています。ここにおられる皆さんはみな違う賜物をもっているのです。危険なことは、人の賜物を見て「あのような賜物を自分も欲しい」と思うことです。たとえば、人の前で目立つような賜物、人から称賛されるような賜物、そのようなものを欲する思いがあります。パウロが警告するのは、そういう思いを持つてはいけませんということです。自分に与えられていない賜物を求めたり、また、自分が欲しいと思う賜物を、あたかも自分が得たかのように振る舞うことをしてはいけません。なぜ、そのようなことをしたいのでしょうか？人から良く見られたいからです。自分が人からどのように見られるか、そんなことを考えるとそのような誘惑に陥ってしまいます。

だから、パウロは言うのです。「そうではなくて、慎み深くありなさい。」と。「慎み深い考え方をしなさい。」と記されています。節度をもって自分を考える、自分を評価するということです。つまり、パウロはここで神はあなたのために特別な賜物をくださった、その与えられた賜物に心から満足しなさいと言うのです。なぜ、すぐ人のものを欲しがるのでしょう？与えられたものに満足しないからです。なぜ、いつも隣の芝生を見てその芝生に惹かれるのでしょうか？自分自身の中に満足がないからです。教会の中でもそのようなことが起こり得るのです。こういう働きをしたい、ああいう働きをしたい、それが純粋に主によって用いられたい、主が備えてくださった賜物を知りたいというのならいいのですが、人から良く見られたいという思いをもって、何か目立つ働きを追い求めていくなら、あなたは間違っているとと言うのです。

神はあなたに一番相応しい賜物を与えてくださったのですから、その賜物で満足するように、この霊的な賜物を自分の自慢の材料にしてはならないと言います。教会の中の姿を少し見ることができます。このように自分のことを誇っている人たち、自慢している人たち、そのような人たちがいたのです。パウロは「へりくだりなさい。いったいあなたは何者か？」と言うのです。だから、私たちは教会にあって、私たちの社会的地位であったり、教育であったり、銀行の口座にどれだけあるとか、そのようなことを誇りません。この世の持ち物を誇らないとはそういうことです。かつてはそのようなところに向けられていた私たちの目は、あるべき姿に、あるべき方に向けたのです。私たちは主によって贖われ、そして、主によって用いられる者として生まれ変わったのです。私たちの関心は主に用いていただくことです。主が与えてくださった賜物を使って、人々に仕えていくのです。教会にあってその賜物を用いて仕えていくのです。そうすることによってあなたは祝され、あなたは用いられ、そして、あなたの周りの人たちも祝され、教会全体が神の栄光を現わす群れになっていくと言うのです。

そのような歩みをしたあなたに、主がどんなに大きな祝福を与えてくださるのか、お分かりになりますね。天に上がったときに、主が「良くやった。良い忠実なしもべだ。」と言ってくださるのはそういう人です。みことばが教えるように歩もうとする人たち、失敗したらそれをみことばが教えるように悔い改めて歩んで行こうとする人たちです。高慢になってはいけませんと言うのです、自分を人より優っていると思うような考えは十字架に張り付けにしないといけません。プライドの問題、このローマの教会にもありました。プライドを考えると、同時に、自分を過小評価する人たちがいることも事実です。

2) 自分を過小評価する人たちがいた

実は、これもプライドの問題なのです。もう一度3節を見て「慎み深い考え方をしなさい」とあります。先程も見たように、この意味は「節度をもって自分を考えたり自分を評価すること」です。本当の自分を正しく知りなさいということです。過大評価している人は正しく見ていないのです。自尊心が強いのです。自慢しているのです。でも、過小評価している人は、自分を見て「私はダメだな…」と思っているのです。神が言われることに対して「私はそんなことはできません。無理です。」と言っているのです。なぜ、これが問題か？それは神がおっしゃっていることを、残念ながら、否定してしまっているのです。神がおっしゃったことを受け入れない、否定するとはどういうことでしょうか？「神さま、あなたの言われていることには間違いがあります。すべての人を神は用いるとおっしゃっていますが、違います。例外があります。私がその例外です。」と、つまり、神がおっしゃっていることが正しくないと言っているのです。

皆さん、我々が覚えなれないといけないことは、最初に見たように、主があなたを用いてくださることによって、あなたを通して主の栄光が現わされていくということです。しかし、もしそのときに、あなたが「いや、私にはできない。」と言うなら、あなたは、あなたを通して主が栄光を現わそうとしているのに、その機会をあなた自身の罪によって摘んでしまっているのです。神はあなたのことを知っておられます。その上で「わたしはあなたを使う」とおっしゃったのです。私たちの信仰は、私たちがどう思うかではないのです。神が何を言われたのかに立っています。良く考えてください。我々の信仰は、私たちがどう思うかではありません。もし、そうならいつもぐらつきます。救われていると思うときと、そうでないときとか、役に立つと思うときとそうでないとか…。しかし、我々の信仰は神のことばに立つのです。皆さんはなぜ、「私は死んでも生きる」という天国の希望をもって今日を生きていますか？天に行って来られましたか？「名札がかかっていたからほっとした…」と、そんな人がいますか？「寝ているときに天から声がして、ここにちゃんと住まいがあるから…」と言ってくれたから、だから、皆さんは「死んでも生きる」という確信を持っているのです？

違いますね。聖書のみことばがそのように言っているからです。神がそうおっしゃっているから私たちは信じるのです。ですから、「私は死んでも生きる」というのは、私がそう思っているわけではありません。神がそうおっしゃったからです。だから、皆さん信じているのでしょうか？主イエス・キリストを信じるときに、あなたもあなたの家族も救われると、あなたが救われ、少なくとも、あなたの家族に福音が広がっていくからです。そのように信じているのです。それなら、私たちは神があなたを使うと言われるのに、なぜ、それを信じないのでしょうか？

ですから、神がそのように言われたとしても「無理です、できません。」と言うことは、よく考えなければいけないのは、自分の考えの方が神のおことばに優っていると言っているのです。それはプライドではありませんか？ジョン・マレーという神学者は「過小評価しているなら、神の恵みを認めることを拒否しようとしている。」と言います。大変なことです。できないと思うことは、神の恵みを認めないということです。神がなさると言われた、全能の神がなさると言っているにもかかわらず、「無理です。たとえ、神であったとしてもできません。」と、どれだけ大きな不信仰なのかです。信仰者の皆さん、私たちは変わることで、変わって行くことです。神の力を信じる者へと変わって行くことです。神のおっしゃったことを信じて、そのみことばに、神に信頼を置いて生きる者へと変わって行くことです。ここにいらっしゃるイエスをお信じになっている皆さんお一人ひとり、この瞬間から「私は神がおっしゃったことを信じます。私がどう思うかではありません。どういう経験をしてきたからではない。神がおっしゃったことを私は信じます。」と、そんな信仰者に変わることを願います。そんな信仰者へと変えられて行くことを願います。でも、そのために必要なことは、神のおことばに立つことです。

今日、パウロが私たち教えてくれることは「神はあなたを用いる」ということです。この神のおことばに対して、神の約束に対して、皆さんの心は興奮していませんか？そのことを期待します。なぜなら、全能の神、すべてをお造りになった創造主なる神が、私やあなたという罪深い存在であることを重々知った上で「わたしの栄光のために使う」と言ってくれたからです。神のご計画に沿って、神の栄光のために神が使ってくれるのです。何という幸いを我々はいただいたかです。しかし、そのような祝福を逃すことも可能です。プライドなのです。私たちはそれを捨てなければいけません。そうでなければ、個人の成長もないし、周りのクリスチャンたちの成長も見られないし、そして、教会の成長の妨げとなってしまうからです。

信仰者の皆さん、確かに、神のおっしゃることは厳しいです。でも、考えてください。神は今日という新しい日をあなたに与えてくださっています。今日から新しい歩みを始めて行くことができます。神が喜んでくださる、神のみこころに沿った生き方を今日から始めることができます。ぜひ、その一歩を

踏み出してください。

2. プライドを捨てる理由 : すべては神の恵み

パウロは私たちがプライドを捨てる理由をこのように述べています。もう一度3節を見てください。「私は、自分に与えられた恵みによって、…」とあります。パウロがこのように言うのです。「自分に与えられた恵み」、これは救いのことではありません。自分に与えられた神からの恵み、つまり、キリストの使徒としてその働きを為すという恵みのことです。彼はここで、キリストの使徒としてこのようなことを教会の人々に語ったのです。でも、自分になりたくて使徒になったのではない。神が一方的に私にこのようなすばらしい、そして、大切な務めを与えてくれたと言ったのです。6節を見ると「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、」とあります。同じことです。あなたに与えられた賜物、霊的賜物というのは、神が一方的なご計画に基づいたものです。パウロが使徒職を得たように、あなたにも特別な賜物があるのです。主イエス・キリストを信じた時に、主はそのような賜物をあなたに与えてくださったのです。

だから、彼が言いたいことは「私たちがいただいた賜物は、我々が努力をしてももらったものではないでしょう。何かをして勝ち取ったものではないでしょう。それなのに、どうしてそれらを誇るのですか？」です。私はこんな賜物を持っている、私はこんなすばらしい祝福を神からいただいていると言って自分を誇るのではなくて、誇るとするならば、こんな自分にこのようなすばらしい祝福をくださった神を誇ることです。パウロが言っていることは「私たちはプライドを捨てなければいけない。」ということです。救いもそうです。すべては神の一方的な恵みです。そして、クリスチャン生活における神からの霊的な賜物も、神からの一方的な恵みなのです。だから、私たちが誇るのは神だけなのです。そのことを先ず、パウロは私たちに注意事項として教えるのです。人々に仕えていくために、特に、そのことに気をつけなさいと彼は教えるのです。

B. 責任 4-6節

私たち一人ひとりに与えられている責任についてです。4-5節「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」、私たちイエス・キリストを信じる者は、イエス・キリストのからだに属する者になりました。それが救いです。Iコリント12:13には「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」、聖霊のバプテスマのことです。聖霊のバプテスマを受けていなければ救われていません。聖霊のバプテスマは一生に一度受けるものです。そして、イエス・キリストを信じ、聖霊のバプテスマを受けた人、この人はキリストのからだに属するのです。そのからだは一つです。たくさんあるではありません。一つのからだに属するのです。

1. 差異

・多くの器官がある : ひとりひとり互いに器官なのです

ところが、そのからだにもいろんな部分があると、同じIコリント12:12に「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分とは多い多くあっても、…」とあります。パウロは私たちのからだの例を用いて大切なことを教えているのです。「一つのからだに多くのいろいろな部分があるでしょう」と言います。ローマ12:4にも「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、」、5-6節には「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。:6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、…」と「異なった賜物」と書かれています。ですから、一つのからだに属しながら、それぞれがからだの違う部分を担っているというのです。

・同じ働きはしない

しかも、4節には「すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、」とあり、あなたにしかできない働きがあるというのです。みなと同じではないのです。あなたは特別な働きをするために、主から特別な賜物をいただいていると言っているのです。同じ、Iコリント12:15には「たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。」とあり、それぞれに働きがあると言うのです。このことを通して、みことばが私たちに教えていることは、すべてのクリスチャンは互いに仕え合ってゆくこと、働き合ってゆくことが必要だということです。すべてのクリスチャンは奉仕することが必要だということです。なぜなら、みな働き人だからです。神がこのように定められたのです。あなたをからだのどこかの部分として、特別にあなたにその働きを与えてくださったのです。だから、その部分が動かないとからだ全体が痛むのです。

あなたが主のために働くことが「主のみこころ」なのです。なぜなら、私たちが見て来たように、神

はあなたに特別な賜物を与えてくださって、その賜物は他とは違う働きをするからです。だから、私たちが「いや…無理です、できません。」と言うならば、我々は主のみこころに逆らっていることとなります。だから、もし、主のために働かない人がいるなら、そのような人は私たちの周りにいないと思いますが、イエスによって救われていながら、神がお定めになった教会の中で、自分の賜物を用いて働きをしていないこととなります。それが不信仰の罪と言われるのはそのような理由なのです。

すでに見たように、神はあなたの弱さを知っているし、あなたの年齢を知っているし、神が生かしてくださっている訳です。あなたの背景も知っているし、すべてを知った上で、神はあなたに特別な賜物を与え、それを実践するために信仰も与えてくれているのです。何が他に要りますか？私たちの決心です。我々が信じて「主よ、どうぞ私を使ってください。」という選択です。その時に主があなたの内に働かれるのです。みな違うのです。だから、みな働きが必要なのです。みなが同じことをするのなら何人かは働かなくてもいい、必要ないと思うかもしれません。同じものが二つあったらどうしますか？「一つはあげるわ…」と、比べて汚い方を捨てるかもしれません。でも、一つひとつが違ったら捨てられません。主はあなたを特別にお造りになり、特別な賜物を与え、そして、あなたがそれを用いて働くように主は望んでいらっしゃるのです。

2. 一致 : からだの一致

みな違いがある、しかし同時に、みなは一つなのだと言います。I コリント 12 : 23-27 「また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、:24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。:26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」、みなが違う賜物をもっているけれど、私たちは一つのキリストのからだなのです。だから、お互いにいたわり合っていくと言うのです。互いのために祈り合っていくのです。互いのために励まし合っていくのです。そうして、私たちがその賜物を生かし合っていくようにと。そのために必要なのが「謙虚さ」なのです。

私たちは人々に「しなさい！」と命じるものではありません。互いに励まし合いながら、それぞれに与えられた賜物を用いながら、その人の信仰の成長のために、周りの兄弟姉妹の成長のために、そして、教会全体のために働くのです。私たちは大切な役割をいただいています。自分自身が働くことです。人々に仕えて行くことです。

C. 種類 6b—8節

そして、この6節の終わりから最後まで、パウロは賜物の種類を記しています。もちろん、これは賜物のすべてを指している訳ではありません。ここには七つの賜物が出て来ます。

1. 預言 6b節

6節「もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。」、預言者は神に代わって、神の名によって語る者です。一人の預言者を紹介しましょう。アガボという人物です。使徒の働き 11 : 27-28 に出て来ます。「そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。:28 その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大ききんが起ると御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウドオの治世に起こった。」と、このような働きをしたのです。また、このアガボは使徒 21 : 10-11 にも出て来ます。「幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。:11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される。』と聖霊がお告げになっています。」と言った。」。ですから、少なくとも、預言者とは聖霊によって神のメッセージを語るようにと導かれた人です。そのような人たちが存在していたのです。その人たちに対してこのような注意がされています。「信仰に応じて預言しなさい。」と。つまり、正しい目的に沿ってその働きを為すようにと言っているのです。人に感銘を与えるために行なうのであってはならないと言うのです。却って、主の栄光を現わすために、お互いの信仰がより成長するために、愛をもってささげることが目的にその働きを為して行きなさいと言うのです。正しい目的をもってその賜物を活かしなさいと。自分が人々から良く見られたいという思いをもってやってはならないと言います。実際に、そのような預言者がいたからこの警告をする訳です。

2. 奉仕 7節

「奉仕であれば奉仕し、」、この働きは、物質的、身体的な必要に関するあわれみの働きです。特に、必要を抱えている人々のために仕えていこうとする働きです。マルタとマリヤの家をイエスが訪問なさったとき、マルタが何をしましたか？マルタは一生懸命イエスをもてなそうとしました。その「もてな

し」がここで使われている「奉仕」と同じことばです。マルタも間違っただけでなく、イエスを一生懸命もてなそうとし、その必要に応えよう、折角来てくださったのだからその方の必要に応えようとなりました。また、この奉仕という賜物をもっている人たちは、特に、貧しい人たちや弱い人たちへのあわれみの働きでもあります。このことばは「執事」という意味ももっています。執事が立てられていったのも、そのように様々な必要を覚える人たちに働きを為して行くためです。ですから、この奉仕という賜物は、物質的に、また、身体的に必要なことを覚えている人たちにあわれみをもって働きをしていくのです。このような人たちはたくさんいるはずですよ。

3. 教える 7節

「教える人であれば教えなさい。」、預言者は神からの啓示を受けてそれを教えました。ここで言われている「教える賜物」を持っている教師というのは、みことばの真理を教える人たちです。ですから、彼らはそのために学びをしなければいけません。この当時は旧約聖書しかありませんでしたから、旧約聖書をしっかりと学び、イエス・キリストが為された教えをしっかりと学んで、その真理を語る、そのような働きをした人たちです。

・初代教会の使徒たちの働き

a) イエスの復活から死者の復活 4 : 2

「この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、」、弟子たちは、イエスの復活から私たち人間の復活について話していたのです。

b) イエスはキリストである 5 : 4 2

また、イエスはキリストであると人々に教えていました。「そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。」

c) 主のことばを教え、宣べ伝えた 15 : 3 5

「パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた。」

d) 神のことばを教えた（コリントで1年半） 18 : 1 1

e) アポロはイエスに関することを正確に教えた 18 : 2 5

「この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。」

彼らはみことばを通して、イエスが教えられたことを人々に教えていました。このような賜物をもっている人もここにおられるでしょう。それなら、その教える賜物を活かさないといけません。

4. 勧め 8節

「勧めをする人であれば勧め」とあります。「勧める」という賜物は、人々が行動へと駆り立てられていくために、そのことを励まして行く人です。無気力さから奮い立って行くように、メッセージによってその人たちを励ましていくのです。彼らが神の喜んでくださる行動に至るように、励まして行く、それがこの「勧める」という賜物です。皆さんの中でも、メッセージをお聞きになって、そして、兄弟姉妹たちに実践のために勧めをなさる人たちがいます。この賜物はそのような賜物です。みことばを實踐するように励ましていく、その賜物をここでパウロが教えるのです。

5. 分け与える 8節

「分け与える人は惜しまずに分け与え」、この「分け与える」ということばは「物惜しみしない、二心なく、真心から」という意味です。ちょうど、あのマケドニアの教会がそうでした。兄弟姉妹たちの必要を覚えたときに、自分たちももの凄く貧しかったのに彼らは喜んでささげたのです。Ⅱコリント8 : 2 「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」、9 : 1 1、1 3 「あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。…:13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。」、彼らは犠牲的にささげました。そのような賜物をいただいている人です。いろいろな必要に対して喜んで犠牲的にささげようとする人たちです。もちろん、我々すべての信仰者がそのようにありたいのですが、特に、ここではそのような賜物をいただいている人たちのことです。人々の必要のために喜んで主にささげて行こうとする賜物をいただいた人たちです。

6. 指導

「指導する人は熱心に指導し」とあります。このことばは新約聖書に8回しか出て来ません。それぞれを見て行くと、教会のリーダーに対して、また、家庭のリーダーに対してもこのことばは使われていま

す。Ⅰテサロニケ5：12「兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。」、Ⅰテモテ5：17では「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。」と、ここでは、特に、教会の霊的リーダー、「長老」とありますが、そのような人たちにこの「指導」ということばが使われています。Ⅰテモテ3：4には「自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。」とあり、「治め」ということばがそうです。「指導する」ということです。もちろん、このような賜物をいただいでなくても、我々男性は家庭が与えられているなら、その家庭にあって一人ひとりをして導いて行くという大きな責任があります。子どもたちがしっかりと主を愛する者として成長するように導いて行くという大きな責任があります。その責任はすべてに与えられています。特に、ここで言われているのは、このような特別な賜物を神からいただいたリーダーたちのことです。そのような人々がいることも事実です。

7. 慈善 8節

「慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい」、「慈善」という賜物のことが記されています。これも先程見ましたが、いろんな必要を見てその必要に答えようとする人たちです。たとえば、病気の人を見て、その人たちに対して何か働きをしたいと、それが病院伝道の始まりです。孤児がいるなら、その人たちに何かをしたいと働きが始まる、そういう賜物のことです。また、刑務所における伝道、ホームレスの人たちに対する働き、障害を持った人たちに対する働きであったりとか、みな慈善の中に入ってきます。つまり、人々の必要を見て、その必要に何とか応えて行こうとする賜物のことです。

パウロは、こういう賜物があると、こうして七つのリストを上げました。皆さんがどのような賜物をお持ちなのか？皆さんもよく吟味なさることが必要だと思います。でも、もっと大切なことを話しましょう。今日の[まとめ]です。

どんな賜物を持っているか、それは周りの皆さんに聞いてみたらいいかもしれません。しかし、もっと大切なことは、賜物を与えてくださった主はあなたを用いるということです。主は、あなたや私を使ってくれるのです。特別の働きのためにあなたを使ってくれるのです。どんな賜物を持っているかによって、我々はそれを自慢してみたり、見下してみたりと、決して、そういうことをしてはならないのです。みな必要なのです。それぞれの働き人が教会には必要なのです。そして、あなたがその働きを為すときに、感謝なことに、あなたの信仰が成長し、兄弟姉妹が成長し、そして、神の栄光が現わされるのです。そのために、あなたが働きを始めて行くことです。「主よ、どうぞ今日から私を用いてください。」と、その祈りをもって始めてください。「神さま、今日、あなたの栄光を現わすために、今まで以上に今日から新しく歩んで行きたい。主よ、どうぞ私を使ってください。」と。もちろん、いろんな事情があって出来ないときもあるでしょう。でも、そんな状況にあってもできる働きがあるのです。何度も見ているように「祈る」という働きがあります。自宅にあってできる働きがあります。

大切なことは「主よ、どうぞ私を使ってください。私はあなたに用いられます。どうぞ、私を今日から用いてください。」という祈りです。そのときに、必ず、主はあなたに重荷を与えてくださる、導いてくださる、そして、用いてくださるのです。それが個人としても、群れとしても、教会としても、大切なことだと主は教えてくださっています。どうぞ、みことばを实践する者として今日から歩んでください。どんなことをあなたを通して、私を通して、主が為してくださるのか、期待をもって、主に従う歩みを今日から始めて行ってください。

《考えましょう》

1. どうしてプライドは罪なのでしょう？
2. プライドから自分自身を守るためにはどうすればよいのでしょうか？
3. 働きに消極的なキリスト者がいるとします。その理由は何だと思えますか？
4. すべてのキリスト者が、教会において積極的に働くためにはどうすれば良いと思えますか？